

フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーン - トゥルネンの「考案者」 の翻訳にあたって

有賀 郁敏*

【解 説】

＊

本稿は、ドイツの学術季刊雑誌『スポーツ科学』(*Sportwissenschaft*) 2000年、第30巻、第2号に掲載されたC. アイゼンベルク「フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーン — トゥルネンの『考案者』」(*Friedrich Ludwig Jahn - "Erfinder" des Turnens*)の全訳である。

著者のアイゼンベルクは、現在フンボルト大学英国研究センター Grossbritannien-Zentrum 教授として、主に近代以降における英独の市民社会、労働者、労働組合運動などを比較史的に論究している。氏の経歴の詳細は省くが、氏はビーレフェルト大学歴史学部教授(当時)にしてドイツ社会(構造)史研究の泰斗。コッカのもとで博士号を取得し(1986年)、1988年から8年間に亘るハンブルク大学歴史学講座の助手として勤務する傍ら、この間に教授資格論文を仕上げるとともに(1996年)、夥しい数のスポーツ史研究を各種学会誌などに(独語、英語、仏語)発表してきた。氏のスポーツ関連学術誌へのデビューは『スタディオン』誌に掲載された「社会(構造)史としてのスポーツ史。英国新刊書考」(*Sportgeschichte als Sozialgeschichte. Überlegungen zu einigen britischen Neuerscheinungen. - in: Stadion, 15, 1986*)である。また1999年には、『¹⁾英国スポーツ」とドイツ市民の社会史1800 - 1939年』(*"English sports" und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800 - 1939, Paderborn 1999.*)という約400頁にもおよぶ大著を刊行した。このように氏にとってスポーツは、英国とドイツの社会、あるいは労働者をはじめとした民衆の生活をよりよく分析するうえで中心的な考察対象、ライトモチーフとなっている。もっとも後述するように、本論文は史料を駆使した実証研究ではない。ヤーンのテキスト、先行研究などを手がかりに描かれたヤーン像の一つの試みである。注記にもあるように、この論文の大枠は、すでに1996年にR. ホルトらが上梓した論文集『ヨーロッパの英雄たち：神話、アイデンティティ、スポーツ』(*R. Holt, J.A. Mangan, P. Lanfranchi (Hg.), European Heroes: Myth, Identity, Sport, London 1996*)に収められた論文、「国民的カリスマリーダー—トゥルネンの父・ヤーン」(*Charismatic Nationalist Leader: Turnvater Jahn*)で発表されており、その意味で著者は、この論文を通じてド

* 立命館大学産業社会学部教授

イツの学界にたいし改めて問題提起を行ったともいえよう。

*

ところで、ヤーンの生い立ちから学生時代、トゥルネンの考案、さらにその禁止に至るプロセスにおいて、この論文が何か新しい史実を提示したいことはほとんどない。それはヤーンの手簡などの史料をはじめ、史実を先行研究に依拠して論じている点に現れている。ヤーンについては、ドイツではもとより、日本でも主に成田十次郎教授、山本徳郎教授による一連の著作が詳細に論じてきたところである。著者の狙いはしかし、別のところにある。著者はここでM・ヴェーバーによる支配類型の「カリスマ的支配」を援用し、新たなヤーン像に迫ろうと試みている。氏の問題意識は、そもそもヤーンが国民意識のなかで、なぜ「トゥルネンの父 Turnvater」となりえたのかということとあり、それを解くカギとしてヤーンのカリスマ的性格に焦点を当てているのである。ヴェーバーによれば、「カリスマ的支配」は合理的な支配である官僚的支配とも伝統的な家父長制的・身分制的支配とも鋭く対立するものである。つまり「カリスマ的支配」は、「それが規則になじまない」という意味において、特殊非合理的であり「（その支配がおよぶ範囲内では）過去を変革し、この意味において特殊革命的である」という（『支配の諸類型』世良晃志郎訳、創文社、73頁）。本論文においてアイゼンベルクは、一方でヤーンの学生時代以降の破天荒な行動や社会通念を超越した身だしなみなどを通じて、また他方で従前の汎愛派教育者などによって用いられた身体文化カテゴリー、「ギムナスティーク」(Gymnastik)から「トゥルネン」への転換、また新たなトゥルネン用語、造語の事例などを根拠に、非支配者が彼の支配を承認し、帰依するというシェーマを定立しているが、この分析枠組みは本論文の特徴となっている。

また、ヤーンが帰依者のみならず、民衆にたいしてもトゥルネンの浸透と広がりを構想し、期待していたことは、トゥルネン運動において「平等」の契機を取り込んでいたことによく示されている。著者が言うところのDuによる挨拶と簡素な制服はこの点を指摘したものだが、カリスマ的支配が、時としてポピュリズムによりそう形で生み出されるという事実を考慮するならば、著者の視点は正鵠を得ているといえよう。さらにヤーンが弟子たちなどに服従を強要しえた利害関係の事実、また男性同盟としてトゥルネンの性格といった、ある種ジェンダー的な観点からのトゥルネン像の提示など、われわれ読者を引きつける興味深い事柄が記述されている。しかもアイゼンベルクは、これらヤーンの「カリスマ性」を、単に個人的な資質に収斂してしまうのではなく、それを19世紀初頭のドイツの社会状況から意味づけようとしており、従前の研究でつとに強調されていた対仏（ナポレオン）ナショナリズムという視点からのヤーン（あるいはヤーンテキスト）像は、ここにおいて彼の「カリスマ的支配」の実態を加味されることにより厚みを増すことになった。

★

評者は著者アイゼンベルクによる新しいヤーン像の試みを高く評価したい。このことを前提に、著者の視座に関して幾つか考察しておきたい。

第1に、アイゼンベルクによるヴェーバーの「カリスマ的支配」の理解である。ヴェーバーによれば、『カリスマ』とは、非日常的なものとみなされ、また「純粋なカリスマは特殊に没経済的である」という。この場合、没経済的とは「必ずしも財産や営為を常に断念することは決してない」が、少なくとも「伝統的なまたは合理的な日常経済、すなわちそれを目ざした継続的な経済活動によって規則的な『収入』を得ようとする」とは軽蔑される(前掲邦訳書、74頁)。アイゼンベルクは、ヤーンの非日常的な活動とそれを通じた彼にたいする「被支配者の自由な承認」の実態を描く一方で、彼がプロイセン官僚機構の一翼として帰依者にたいする「合理的かつ規則的」な利害の実権を握っていた事実を重視している。この点はヤーンならびに初期トゥルネンの官許運動的性格を物語るものとして、トゥルネン史叙述においても重要である。しかし、このような状況は「カリスマ的支配」の日常化あるいは逸脱として、かのシェーマといかなる関係にあるのだろうか。真性カリスマとしての理念型と日常化に関する説明が必要ではあるまいか。

この点と関連して、第2に、トゥルネン用語の考案とヤーンのカリスマ的支配との関係が十分に説明されていない。著者は、ヤーンが新たなトゥルネン用語を考案することで伝統的な身体文化にたいするトゥルネンの革新性を強調する一方で、しかし、同時に生活、労働から派生した用語をトゥルネン用語へ接合させるという、ある種の用語の親密性、大衆性にも着目する。各邦において、方言が生き続けていたことは著者自身も指摘している点であり、後者の事柄が国民的位相において、どの程度実態化していたかは不明である。しかし、この点はさしあたり問題ではない。生活と労働の場で用いられる用語が身近なものとして大衆的性格をもつことは、当時にとっては、それが歴史伝統(あるいは伝承)的な存在だという要因が大きく、ヤーンのカリスマ的支配を説明しようとするとき、それはトゥルネン用語の伝統的身体文化からの革新性と一体どのような関係にあるのだろうか。

第3に、そもそもアイゼンベルクは国民意識に宿るヤーン＝「トゥルネンの父」という表象を前提に論を展開しているが、果たしてそれは歴史的に普遍性をもつものなのだろうか。20世紀前半の国民社会主義時代のように、確かにヤーンはナショナリズム(さらにまた人種主義的ナショナリズム)としばしば接合され、「トゥルネンの父」は「指導者」(Führer)のメタファーで語られもした。しかし、ヤーンが常にそうであったわけでは決してない。少なくとも19世紀の40年代、とりわけ1848/49年革命期の西南ドイツにおいて、ヤーンは「トゥルネンの父」から「民衆の敵」へと反転する。この点はアイゼンベルクも引用している論文のなかでランゲヴィーシェがつとに強調した論点である(D. Langewiesche, "...für Volk und Vaterland kräftig zu wirken..." Zur politischen und gesellschaftlichen Rolle der Turner zwischen 1811 und 1871. In: O. Grupe (Hrsg.), *Kulturgut oder Körperkult? Sport und Sportwissenschaft im Wandel*. Tübingen 1990)。「カリスマ的支配」という

理論枠組みでヤーン像を説明するという本論文の主旨からすれば、評者のこの疑問は本稿の範囲を超えているかもしれない。しかし、「カリスマ的支配」が社会状況を基盤に出現するという著者の命題、ならびに「ヤーン以降のトゥルネン運動」（第3節）を論じるのであれば、民衆の意識のなかで発酵するヤーン像の歴史的変遷過程についても一言触れてしかるべきであろう。

第4に、上記の点と関連して、「トゥルネンの父」という表象は女性にたいしてはどうであったのかという問いである。著者も語るトゥルネンの男性同盟の性格は、三月前期の自由主義的なトゥルネン協会にあっても、基本的に継承される。つまり女性は、当時、トゥルネンの圏外におかれていた。このような、ある種のジェンダー的な見方に鋭敏であり、実際にトゥルネンの男性同盟の性格を強調していたはずの著者が、「トゥルネンの父」という表象そのものの内に内在する男性同盟の性格に言及しなかったのは残念である。なぜなら、民衆の意識に潜む「トゥルネンの父」という歴史の記憶は、往々にして「国民の記憶」というナショナルな心性に回収されてしまうのだから。

*

本論文は、立命館大学非常勤講師である市井吉興の訳出をもとに、市井と評者の議論を経て翻訳された。本文注ならびに文献一覧は市井が最終的に整理した。翻訳の過程で著者の「カリスマ的支配」の理論などをめぐり意見交換がなされたが、この解説で触れている批評はあくまでも評者個人の考えであり、したがってその責任は全て評者にある。なお、山本徳郎教授による本論文の書評が、日本体育学会体育史専門分科会の学会誌『体育史研究』第18号（2001年3月）に掲載されている。

最後になったが、本論文の翻訳と本誌への掲載を快諾してくださったC・アイゼンベルク氏にたいし、ここに記して謝意を表したい。

〔翻 訳〕

フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーン - トウルネンの「考案者」

クリスティアーネ・アイゼンベルグ* 著
市井 吉興**・有賀 郁敏*** 訳

はじめに

F. L. ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn 1778-1852) は、ドイツのなかで、およそ200年前から絶間なく大衆的な支持を獲得してきている。このことは国家形態や政体の変遷を超えて、道路、広場、学校、スポーツ競技場が、次から次へと彼の名をとって命名されたことを見れば明らかである。また、ヤーンが「トウルネンの父」としてだけではなく、早くから反ユダヤ主義・民族主義思想の煽動者としての名声を博していたにもかかわらず、ヤーンに注がれるこのような大衆的な支持には根強いものがある。こうしたヤーンにたいする持続的な共感の説明される必要があり、そのためには社会全体を視野に入れた長期的な考察が求められているといえよう¹⁾。本稿においてはしかし、この点をトータルに成し遂げることは不可能である。したがって、ここではそのような考察の前提となるべき問題を取りあげたい。つまり19世紀初頭において、いかにしてヤーンという民衆出身の人物が国民的英雄になることができたのかという問題であ

る。というのも、特定の個人にたいする一般的な尊敬や畏敬の念は、長い期間を隔てて個人と社会的環境間の濃密なコミュニケーションが確保されることを前提にしているからであり、このような限定された条件をヤーンの存命期間(1778-1852)に当てはめることはできないからである。なぜなら、そもそも公共圏は濃密なコミュニケーションを通じて形成された社会的空間として理解されるのだから。以下、この点について敷衍しておこう。

(1) 神聖ローマ帝国、ならびに1815年に成立したドイツ連邦は、国民国家というよりは、むしろ「繕われた絨毯 (Flickenteppiche)」であり、そこには小さな王国、侯国、公国が様々な盟約のなかで関係づけられており、部外者にとってはひどく理解しがたい方言が使われていた。また、領邦国家の君主の支配欲求は、コミュニケーションを制限した。そうすることで、旅行者は劣悪な交通諸関係におかれただけでなく、さらに関税障壁を通過せねばならなかった。

(2) 商業や工業化が未だ発展途上にあるなかで、農業はドイツ連邦においては最も重要な産業領域であった。また、多くの商工業の生産者

* フンボルト大学英国研究センター教授

** 立命館大学非常勤講師

*** 立命館大学産業社会学部教授

は、地域の市場や商品の販売を肩代わりする卸売商のために働いていた。そのうえ生業者の大半は、手工業雇職人が奉公人であり、少なくとも部分的には現物で報酬が支払われていた。したがって、彼らはコミュニケーションの媒体である貨幣をほとんど自由に使うことが出来なかった。

（3）社会構造は固定化されていた。つまり、個々の身分 - 例えば、貴族、聖職者、市民 - は、法律や生活様式によって相互に分割されており、ほとんど社会的な交渉を互いに持つことはなかった。下層民は、もっぱら無権利状態にあり、部分的には封建的な従属関係のもとにあった。したがって、諸身分を超えて個々人が名士として立ち現れることは、一般的にはありえなかった。

ヤーンがこのような諸条件にあって、公的な活動を行う人物として登場したことを、「ヤーンは魅力的な人格であった」という19世紀のヤーンの伝記が異口同音に述べている理由だけで判断してはならない。むしろ次の事柄が推察できるように思われる。すなわち、ヤーンがその名声を確立させる以前から人々を惹きつける磁場を築きあげてきたことであり、初期のトゥルネンがしたがって、公的な活動として理解するだけでなく、公共の場に集う人々のコミュニケーション空間を定立した活動として捉えられねばならないということである。

この解釈を説明するためには、ヤーンならびに1810年から1819年までのトゥルネン運動をM・ヴェーバー（Max Weber）の「カリスマ的指導者」という理論枠組みを用いて分析する必要がある。この理論枠組みは、ヴェーバーの支

配の社会学においては、以下のような機能を果たしている。すなわち、「伝統に拘束された時代であって」、危険に屈することなく、非常に神懸かった人物を讃える「偉大な革命的な力」としてカリスマを理解するということである²⁾。つまり、ヴェーバーに従えば、一人の人物にカリスマを提供するある種の「非日常的な能力」ではなく、カリスマが登場する社会的環境、すなわち非日常的な能力を信奉する支持者や若者の集団の方に具体性がある。したがって、一般的に「カリスマ的な指導者」にたいしては、困窮のなかで彼が救世主であることを示しうる危機的状況が必要とされるのである。

ここでいう危機とは、ナポレオンに敗北した1806年以降のプロイセンの悲惨な状況であり、このなかでヤーンは「カリスマ的指導者」と成りえたのである。まず最初に本稿の第一節において、かかる状況が素描される。続いて第二節において、ヤーンならびに彼を取り巻くトゥルナーたちをめぐり、「カリスマ的指導者」と彼の帰依者たちとの間で取り交わされる社会的関係に関するヴェーバーモデルのメルクマールが具体的に説明されるだろう。ヴェーバーによれば、この関係は、情緒的な共同体ならびに十分に組織化されない制度のなかで発展していくという点に特徴づけられている。また、官僚機構は合理的な経済と同様に不必要なものであったが、それは共同体の活動が寄付ならびに犠牲を通じて賄われていたからである。ヴェーバーによれば、「カリスマ的指導者」は、むしろ彼によって招聘され、彼の啓示によって啓蒙されたと感じている人物たちの中から幹部たちを募集採用した。最後に、本稿の第三節において、「カリスマ的指導者」を取巻く情緒的共同体の特殊な不安定性を扱うことになる。この不安定

性は以下のことを結果たらしめる。すなわち、「カリスマ的指導者」には、傷つきやすい、はかない人物がからんでいるということである。この構造的な問題の叙述とヤーン以降におけるトゥルネン運動の発展への展望が結びつけられるであろう。

1. プロイセン人—ヤーン

伝道師の子として生まれたヤーンは、幼少の頃から「自制心のない」ということで目立っていた³⁾。ヤーンは、この性格を大人になっても持ち続けていた。ヤーンは10の大学に通った後に、最終的には1803年に怠慢、借金、喧嘩によってハレ大学の同郷人会学生同盟の構成員から追放された。「論旨退学」に追い込んだ所見には、「ヤーンは、ここではアカデミックな市民として全く受け入れられない」(Neuendorff o.J.: 25)という結論に至ったことが記されていた。

近年スポーツ史においても採用されてきた、社会に不適合で何か風変わりな同時代人としてのヤーンの性格は容易に推察できるが、しかし場合によっては、この点は今日の読者に誤解を生じさせる可能性がある⁴⁾。なぜなら19世紀への転換期において、ヤーンは大学指導部に衝突した唯一の学生ではなかったからである。むしろ、ヤーンは学生改革運動の担い手の一員であった。この学生改革運動は、「貴族的・封建的」な文化要素から大学を解放し、大学を市民的な感覚のもとで改革するという明らかに政治的な徴候を示していた。さらに、彼らの「落ち着きのなさ」は、ロマン主義的な生活様式に付き物だったのである⁵⁾。「変わり者」として語られる性格にたいしては、ヤーンは一貫して市民的

な生き方を求めたと反論することもできる。大学から不名誉な退学を余儀なくされた後に、ヤーンは自らを無能なものとみなした。29歳になったヤーンは、ただ「高地ドイツ語」に関する論文だけを提出しなければならなかった。この論文は1806年の公表に際して、J. G. ヘルダー (Johann Gottlieb Herder) の賛辞を添付してはいたものの、何の報酬も得ることができなかったものである。またヤーンは結婚しようとしていたので、手当たり次第に家庭教師の職を引き受けた。

このようなヤーンの個人的な危機的状況は、プロイセンの旧政体の危機と時期的に一致している。1807年、ティルジットの和約はナポレオンにたいするプロイセン軍の壊滅的な敗北を決定づけ、同時に官僚機構や軍隊に関連する改革勢力を勢いづけた。シュタイン (Karl Freiherr vom und zum Stein) のもとで導入され、後にK. A. v. ハルデンベルグ (Karl August von Hardenberg) に継承されることになる、プロイセン国家再編に向けた様々な措置は、農業と営業、金融、公的な官僚機構、都市、学校、そして軍隊に関する徹底的な改革が含まれていた⁶⁾。その際、フランスの「国民総動員」を手本とみなしたので、改革者は住民にとって特殊な構想にたいする理解を得ようと努力した。改革者はまた、ドイツの国民意識を創出しようとした。なぜならフランスの占領統治は、決してドイツ国民の一致した拒否に直面してはいなかったからである。占領者のプロパガンダを通じてナポレオンの胸像が、1806-07年にかけて流行を極め、しかも多くのプロイセンの人々は、進駐してくる将校たちからパリの新しい出来事を聞くことを楽しみにしていた (Johnston 1990: 30)。

このようなことを背景に、改革者、なかでもシュタインは詩人、作家、知識人に相談を持ちかけ、彼らに国家の再編に関する援助を求めた。このことは短期間のプロパガンダ・キャンペーンではなかった。というのは、むしろ民衆にたいして以下のような影響を及ぼすべきものであったからである。つまり、シュタインの要請は持続すべき一定の思考様式、態度、そして感情を創出することにあった（Johnston 1984: 50, Riesenberger 1996）。活動家のグループに受け入れられた者たちのなかにヤーンも含まれていたが、彼は熱狂的な愛国者や狂信的なプロイセン人として有名であった。シュタインによる「国民神話」（Johnston）という企てにたいして、哲学者 J. G. フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte）、神学者 F. シュライエルマッハー（Friedrich Schleiermacher）、劇作家 H. v. クライスト（Heinrich v. Kleist）、教育学者 J. W. ブーフエルン（Johann Wilhelm Suvern）、出版者 G. ライマー（Georg Reimer）、歴史学者 A. ヘーレン（Arnold Heeren）や H. ルーデン（Heinrich Luden）が協力者として参加した。シュタインへの協力はしかし、彼の政治的な表象によってのみ実現したのではない。つまり、彼らの参加は彼らの自己顕示欲を満たし、彼らの金銭的窮状にたいする打開策を見込んでのことで、実際に、知識人たちを無報酬で働かせることなど期待できるものではなかったのである⁷⁾。

シュタインから協力を依頼された知識人たちにとっては、共同作業の対象集団が教養ある裕福な市民階級であるのにたいして、ヤーンは、まず第一に中産階級出身の青少年に目を向けた（Johnston 1990: 166f）。ヤーンはこれを二つの方法で試みている。第一に、ヤーン - おそらく

プロイセン政府の使命を受けて - は、『ドイツ国民性（Deutsches Volksthum）』というタイトルの著作を発表した。1810年にリューベックで発刊されたこの著作において、ヤーンは上流社会における悪癖と偽善に関して、同時代の通俗的な哲学者の冗長な思想を再現した。ヤーンは、ユダヤ人やジプシーにたいするドイツ人の先入見を立証するために、ドイツ人の「純粋なキリスト教精神」を力説し、文脈を無視して聖書の名言の盗用や曲解に努めた。さらにヤーンは「高地ドイツ語彙纂」という彼の観点から、言語改革を繰り返し提案した。しかし『ドイツ国民性』には、別の一節が含まれていた。つまり、一風変わってはいたが簡素な言葉を用いて、ヤーンは指導的な改革者の政治や組織に関する考え方を批評したのである。批評の対象となった人物のなかで、とりわけシュタインやハルデンベルグ、また N. v. グナイゼナウ（Neidhardt v. Gneisenau）や G.J.D.v. シャルンホルスト（Gerhard Johann David v. Scharnhorst）は、ヤーンが1807年から1809年の間に外交特使として関係があったときに、個人的に知り合った人々である（Frank 1972: 37）。「国民教育」というテーマの実現には、あきらかに1809年12月に国王にたいして行われた W. v. フンボルト（Wilhelm v. Humboldt）の報告が基盤となっている。この報告には、シュタインに指示されたプロイセンの学校制度の新たな組織化が示されていた。ヤーンが新たなドイツの分割について述べなければならなかったことは、内容的にはヤーンがかつて師事した大学教員である E. M. アルント（Ernst Moritz Arndt）の要求と一致していた。また、国民軍の創設、軍事規律の緩和、農奴制の廃止といったヤーンの提案は、1808年から行われたグナイ

ゼナウの討議を再現したものであった。このなかでシュタインやシャルンホルストから激励されたように、ヤーンは国王に北ドイツにおける国民蜂起のための計画を提出したのである⁸⁾。

シュタインの罷免以降、改革者にとって依然として課題としてありつづけた反乱計画との関係において、ヤーンの第二の著作は「国民神話の試み」と思われた。つまり、このことは準軍事的な予備軍を徴募する目的をともなった「トゥルネン運動 (Turnbewegung)」の発足である。ティルジットの和約がプロイセン軍勢力を42000名へと削減したことを考えれば、ここで言われているトゥルネンの指導性という価値が際立ってくる。それゆえに、将来の国民による防衛や兵士、つまりナポレオンにたいする解放戦争は、市民生活のなかで準備されるべきであった。また、このようなイニシアティブは、若者にたいして直接向けられることになり、また市民と軍事機関との協定を実現させた⁹⁾。しかし様々な、特に財政的理由から、このイニシアティブは、さしあたり学校制度の外で展開された。

2. トゥルネンの父—ヤーン—

ヤーンの課題は非常に野心的であった。なぜなら、ヤーンは「伝統の創造者」として活動しなければならなかったからである (Hobsbawm 1983: 1-14=1992: 9-28)。確かに「身体運動 (gymnastische Übungen)」は、すでにギリシャの古典古代から存在しており、また18世紀末期において何人かの啓蒙主義的な教育者たちは、身体運動を高貴な精神修養の基盤において新たに構想したのである。その教育者のなかで最も重要な人物は、シュネッペンタ

ールの汎愛学校の教師であるJ. C. F. グーツムーツ (Johann Christoph Freidrich GutsMuths) であった。この学校はチューリッゲンの森に位置するエリートのための寄宿学校であり、ヤーンも以前そこを訪問したことがある¹⁰⁾。この運動はしかし、わずかな教養エリートたちによってのみ実践されたものであり、住民の大部分は、この運動のことを全く知らなかった (Eisenberg 1999: 81-95)。

トゥルネンは1810年の夏に開始されるが、それは政治的同志の支援をうけて、ヤーンがベルリンにある私的なプラマン学校の補助教員になった後のことであった。ヤーンの友人であるF. フリーゼン (Friedrich Friesen) も教師をしていた全寮制の学校は、同時に地下活動の中心でもあった¹¹⁾。授業のない水曜日や土曜日の午後に、ヤーンは20名の生徒たちとともに身体運動をするために町の門の前で散歩を行った。これに興味を持った何人かのギムナジウムの生徒がこの運動に加わり、冬にはフリーゼンによって指導された剣術と射撃訓練に参加し、ついに1811年の春、ハル門の前にあるハーゼンハイデの広場を確固たる運動場として柵で囲ったのである。ここにヤーンの指導のもとで青少年たちは登攀用の足場を作り、ジャンプ台と着地用砂場を設け、競走路を整備した¹²⁾。時とともに、トゥルネン場は散歩する者にとってのゴールとなり、見物人の数も増加した。1813年の新春の演技会に際して、10000人がハーゼンハイデに集まった (Düding 1994: 56; Cotta 1919: 81)。

参加者はもっぱら「孤児から貴族の師弟まで」のあらゆる階層出身の大学生や生徒であった。1812年から日曜日にトゥルネンが行われて以来、職業を持っている若者たち - 彼らは手工業

雇職人や「若い商人」であったが - がハーゼンハイデを訪れた（Bornemann 1814: 44）¹³⁾。すべての参加者は、訓練場の拡張や運動器具を調達するための費用を支払わねばならなかった。支払い能力はないが「勤勉さと徳性」に秀でている者は、会員証（「物事は皮へと近づく」ということから、皮のマークがついていた）を無料で配布された¹⁴⁾。さらにトゥルネン施設には、個人的な後援者からの援助が割り当てられた。また、「解放戦争」に何百人ものベルリンの生徒や学生が志願し、多数のトゥルナーがリュッツヴォの義勇軍に加わったことが確認された後に、彼らは一遅くとも1815年以降—国家からの報奨金を受けることになった¹⁵⁾。年間150ターレルの寄付金、および登攀施設と体操器具にたいする建築資材と用材を提供されたのである（Steins 1986: 29, 37f; Gotta 1913: 83）。この時点で、「責任者」であるヤーンならびに教師であったE. アイゼレン（Ernst Eiselen）は、すでに年間800ターレルないしは400ターレルを国庫から受け取っていた¹⁶⁾。1817年夏に訓練はさらに組織化され、1400名から1600名までの若者たちが同時に訓練できるようになったのである（Steins 1986: 42）。

この成功は、二つの理由から説明することができる。第一に、当時、ハーゼンハイデでの軍事的訓練は忌避されていたということである。「軍事教練的なもの」は、軍隊の再編にたいするプロイセンの改革者の構想と矛盾していた。しかし、それ以上にヤーンたちは、フランスの占領軍がトゥルネンに気づくことを避けたかったのである（Bornemann 1814: 99）。しかし「反軍事教練的なもの」は、ヤーンの信念を表現したものに他ならなかった。その信念とは、若者たちは自分たちの身体をのびのびと育成さ

せ、功名心と自己規律を発展させるべきものであるということである。ヤーンによって教えられた運動に関してみれば、ヤーンはまぎれもなく「文民」のままであった。また、ヤーンはグーツムーツ、ならびに当時の他の教育者がえがく理想に依拠していた。ヤーンは「トゥルネン」が全体教育にとって主要な領野以外のもの」ということを決して認めなかった¹⁷⁾。このことを明確にすることは必要あるまい。たとえ出版物において示された反響がいかなるものであったにせよ、同時代の人々は運動のモチーフをはっきりと認識していた。若者たちは、まず登攀、跳躍、運搬、平衡、格闘、走、戦争ごっこ（「泥棒と市民」のような遊びと同じもの）をするとき、彼らは射撃を修得し、行進を行い、方向転換をしたり、隊列を維持することを容易に学ぶのである（Archenholz 1812: 18）。

しかしながら、ヤーンによって選ばれた「トゥルネン」という命名によって、これらの運動は隠された軍事的な特徴を持っていた。この観点は、トゥルネン運動が成功するための第二の前提条件であった。言葉に関して述べれば、それは、同じように創られた国民性と同様に言語に関する歴史的研究や現在使用されている方言の知識に基づいている「造語」が重要であった。ヤーンによれば、古い北欧系言語のなかに「トゥルナー」は「兵」を意味し、またさらには中世の「馬上槍試合（Turnier）」を想起させる¹⁸⁾。もっとも、同時代のものがヤーンの捉え方を実際に検証したかどうかは不明である。いずれにせよ、この「トゥルネン」という名称を用いることによって、トゥルネンはハーゼンハイデにおける運動の目的から名付けられたわけではないのに、宣伝効果のある実質をものにしたのである。つまり、汎愛主義的な教育者が用いた

「遊ぶ」,「ギムナスティーク」,「身体訓練を行う」,「形作る」または「器用にさせる」のとは対照的に,トゥルネンと短く表記することは,言語変化とともに一般の人々に広くアピールするうえで効果的であった。さらにまたトゥルネンというアソシエーションは,同時代人の多くが抱いた確信のなかで,幸福な時代であったドイツの過去の記憶を呼び起こすのである。1819年から1820年におけるに世情の急変によって「トゥルネン禁止(Turnsperre)」が発令されたとき,一般的に「turn」を冒頭に置いた合成語が,少なくとも60あった。例えば,これらの合成語は「トゥルナーの名誉(Turnerehre)」,「トゥルナーの誇り(Turnerstolz)」,「トゥルネンの躰(Turnzucht)」,「トゥルナーの友情(Trunerfreundschaft)」というものであった。このような「トゥルネン用語」の多くは,ヤーンが創設した「トゥルネン専門家委員会(Turnkünstlerrats)」の協議から誕生したものである。また,この委員会には「トゥルネンの専門家」と「一般の知識人」が招聘されていた。ここでトゥルネンの専門用語が分析,加工され,出版物を通じて,その成果が公表されたのである(Jahn und Eiselen 1816: VI)¹⁹⁾。

この専門家委員会は,個々の運動,器具,そして教育された成果の新たな命名にも取り組んだ。本質的には,以下に記す3つの言語の用法が用いられている。第一に,外国語の名称をドイツ語に置き換えることである。その際,トゥルネンにおける訓練要素のフランス語の修正が優先された。例えば,Scheereはcroisé,Fechteはrapierを象徴している。また,balancierenからschwebenやschwebgehenが,voltigierenからschwingenが発案される。木

馬以外で,ヤーンによって導入された「平行棒」や「鉄棒」,様々な鞍馬運動は,短く,納得がいくように,「ターン(Wende)」,「上向き横飛び越し(Kehre)」,「抱え込み(Hocke)」,「開脚跳び(Grätsche)」と名づけられた。第二に,ヤーンと専門家委員会は言葉の反転を行った。例えば,「高跳び(Hochsprung)」を「Sprunghöhe」に,「巾跳び(Weitensprung)」を「Sprungweite」に,「遠投(Weitwurf)」を「Wurfweite」に,「的当て(Wurfziel)」を「Zielwurf」という具合である。第三に,彼らは以下に述べるように職業生活から概念を導入した。例えば,HolmやBühneを鉱山労働者や大工用語から,Gaffel,Reede,RustそしてTauを船員用語から anfußen, anschultern を漁師用語から Hantel, Schwingel または Voltigierbock, Springel または Hochsprungerüst を定まった道具の名前から導入したのである(Zeidler 1942: 43-51; Göhler 1962: 2293ff)。

これらの事例は,言語作成の情熱の背景に「ドイツかぶれ」や「フランスへの敵愾心」以上のものがあることを明示している²⁰⁾。平明かつ実践に適したトゥルネンの専門用語を発展させることは,ほとんどの同時代人々に,それが全く新しいものとして認識されねばならないし,それが事実であるという成果の前提条件であった。このことを認識させたのは,「トゥルネンの父」であるヤーンの功績である。つまり,ヤーンは言語学的な野心ならびに学生時代の遍歴のなかで習得した日常生活の知識を通じて,この種の問題にたいする感受性を発展させたのである。長い間,トゥルネンの用語は「ドイツ」のみならず,「市民の」運動としてのトゥルネンを受容させるうえで,不可欠な前提としてみ

なされたのである。なぜならば、「跳馬をする」,「バランスをとる」といったトゥルネンの中心的な身体運動の要素に新しい名前を与えることによって、貴族的な素性を隠すことになるのである。また、いくつかの異なった職業用語の借用をつうじて、トゥルネン用語は汎愛主義的な教育学によって提示されていた「ギムナステーク」と「労働」との関係を具現化させているからである。

トゥルネンを社会運動の基盤とするという第三の対策は、平等な共同体への参加者の結束である。そこで社会的な差異を隠蔽するために、ヤーンは若者たちに「あなた（Sie）」ではなく「君（du）」で話しかけることを要求した。また、彼らは制服を身につけなければならなかった。「平等な服装」と名づけられた制服は、丈夫で漂白されていない亜麻布で作られており、この亜麻布は、当時、ドイツの至る所で入手可能な唯一の素材であった。ヤーンが言及しているように、「もし外国の素材からできた服装が黙認されるとしたら、トゥルネンは」、裕福なもの、資産家、金持ち、そして貧乏人のための運動といった具合に分類されねばならなかったであろう（Jahn und Eiselen 1816: 226）²¹⁾。青少年たちに好まれた「平等な服装」は、同時に「ドイツ民族の服装」として考えられた。外国人はこの服を身に着けてはならない。また、いずれにしても市民権を失った者もこの服を着てはならないし、市民権の行使をしなかった者も着てはならない²²⁾。

「平等」に向けられたヤーンの努力は「時代精神」に照応していたが、「トゥルナー軍団（Turnerarmee）」を戦闘能力のある集団へと作りあげることも狙っていた。それゆえに、トゥルナーは身長に応じた班に振り分けられ、そ

こで誰が一番最高なのかが決められた。この最高のものは、たいてい最年長の者であったが、「フォアトゥルナー（Vorturner）」として班を指導しなければならなかった。同じように進歩的な軍隊の改革者も、兵士を通じて下士官を選ばせ、同時に集団の力を蓄え、発揮しうる土気の現実化を要請していたのである（Antonowysch 1933: 25; Wehler 1987: 468）。さらにまた、トゥルネン運動の措置の性格やエートスは独立し続けるべきであった（Simmel 1908: 94=1994: 107-108）。既存の班が大きすぎた場合、新しい班は既存のものからの分割を通じて大きく成長していった。例えば、鉄棒の場合、これはハーゼンハイデで最も好まれている訓練であったが、蹴上がりや懸垂の回数を数えることによって、彼らは出来栄を測定することを可能にした。他方では、運動基準の拡大と専門化を通じて新しい班が生まれた。トゥルナー自身もそれに関心を示した。なぜならトゥルナーたちは、この方法により「仲間集団」のなかで高く評価されたからである²³⁾。

規律化を打ち立て、班の孤立を阻止するために、ヤーンはさらに遊戯と競争を行った。ヤーンはこの方法で相互に個々の小集団の対抗関係と、彼らの内的な結束を促進させたかった。競争が個々のグループ・メンバーの差別化に役立ち、エゴイズムを誘発することが判明すると、ヤーンはこの措置を断念し、競争のなかに試験的な要素を付与した²⁴⁾。「分割し、統治せよ」という隔離技術は、フォアトゥルナーたちの特権であった。ヤーンは彼らに特別なトレーニングをさせ、定期的に彼らにたいし協議を求めた²⁵⁾。この協議は、ヤーンが「下から」のイニシアティヴを誘発し、コーディネートする機能を持っていた。同時に、ヤーンは「実技指導者」に固

有のイメージと指示を仲介する機会を与えた。トゥルナーであるC. E. L. デュレ (Christian Eduard Leopold Dürre) が回想録に記しているように、ヤーンは心理学的に非常に巧みなやり方で以下のことを成功に導いたと思われる。つまり「ヤーン自身にとってさえ何か実現不可能な考えを適当な人物に持ちかけたときに、ヤーンはそれを彼自身が考えたと思わせてしまうのである」(Cotta 1913: 49) と。

このような責任を委ねてしまうという「トゥルネンの父」の権限は、若者たちをトゥルネンに熱中させるうえでの重要な必要条件であった。さらなる必要条件は、厳かで、いわば宗教的な雰囲気醸成を、共同体的な体験を仲介させるヤーンの才能であった。その機会を、特に「トゥルネン旅行」において提供されている。この旅行においてトゥルナーは、なかでもフランス軍への襲撃の訓練を行ったのである。それはすなわち、前哨が配置されたり、パトロールが派遣されたり、待ち伏せの場所が設けられたのである。旅行中、ヤーンはトゥルナーたちに賛美歌を歌わせ、祈りを捧げるように命じた。また夕方の礼拝の際に、ヤーンは「世界を指導する偉大なトゥルネン指導者」を賞賛したのである。歴史的な名跡や地方における印象的な舞台を背景にして、ヤーンは若者たちに戦記を互いに朗読させた。そのレパートリーはトイトブルグの森におけるヘルマンの戦いから、「解放戦争」にまで及んだ。この厳粛な雰囲気は、自分自身も英雄的行為を成し遂げるといふ青年男子の願望をかきたてたのである²⁶⁾。

このような白日夢はトゥルネン共同体における男性同盟的な性格を通じて、一つの強調点を特徴づけた。つまりこの性格は、戦いの技術やヤーンの運動から女性を排除するという結果を

もたらしたのである。つまり若者の最も重要な徳目である貞操は、力強い身体と健康的な情緒のなかで現れるのだという想定を基礎づけたのである。この点は、ヤーンがフォアトゥルナーを斡旋する際の承認の前提となった。自慰行為や女性との性交は道徳的な脆弱性を示す兆候であり、これらは身体にたいして有害なものとされた。それゆえに、トゥルナーの議論のなかで身体的衰弱とプロイセンへのフランス的なものの侵入は、去勢の比喻として説明された。このことをヤーンは「侵食性の癌は、我々の高貴な部分を蝕み、我々は衰弱し、必ずぞっとするような時代に直面する」(Jahn 1885: 214) と述べたのである²⁷⁾。「男性性」というトゥルナー的なエートスは、男性同盟の無意識なホモ・エロティックを道徳的・政治的カテゴリーへと転化する手段として示されたのである²⁸⁾。

この意味における「ドイツ的人間」のプロトタイプは、まず最初にヤーンの友人であるフリーゼンによってもたらされた (Jahn und Eiselen 1816: VII)。1814年、フランスとの戦いに敗れた後、英雄理念の手本を示したのがヤーンであった。誰よりもましてヤーンは、「ドイツ人の本性の充溢を、その完全なる偉大さのなかで具現化した」のである (Liebetrant 1867: 94)。それについてヤーンは「身体運動のマイスター」であり、彼が好んで強調しているように、「偉大なる身体之力と、より優れた熟練さを意のままにする」ということに貢献したのであった (Jahn 1884: 443)²⁹⁾。また、トゥルナーの理想である非妥協性とヤーンの反権威主義的な振る舞いは、同時代の人々に感銘を与えた。ヤーンは唯一人、髭をたくわえ、髪を長くのばし、古典的なドイツの衣装を身に纏い目立っていた。ウィーンでの会談に際して、ハル

デンベルグの家に食事に招かれたとき、ヤーンは「完全なるドイツのトゥルネンといういでたち（ganzen Turndeutschheit）」で現れ、「ヤーンは（そのスタイルは）そこにふさわしいと考え、ごく一般的な服を着ていた」とK. A. v. エンゼ（Karl August Varnhagen von Ense）は回想している。つまり、ヤーンは唯一人長靴を履いてハルデンベルグ宅を訪ねたのであった。また、エンゼの回想によれば「爽やかな天気なのにヤーンは泥だらけの格好をしていた。というのも、ヤーンは適当な服装をしていたのだが、普通の人ならきれいにするのにヤーンはわざと服を汚したと考えられた」とある。とりわけ「ヤーンの簡潔な演説には、断固とした態度、思考の強引さによる容赦なさが表れていた」というように、彼はヤーンの性格にたいし感銘を受けている。また、同席していたフンボルトもこのことを「ヤーンは自らを表現することに熱中していた」と証言している（Gleichen und Russwurm 1909: 116）³⁰⁾。

さらにまた、ヤーンの性格に好意的な態度を示した知識人のことを指摘するなら、フォアトゥルナーがヤーンにたいして絶対的に服従していたという事態は驚くべきことではない。フォアトゥルナーの使命感は、彼らの指導者ヤーンの使命と啓示の帰結であった。彼らは、ヤーンのことを様々な機会において「神託」のように受け入れ、「ヤーンの口から発せられた金言」を書き留め、「最高の宝物」のようにそれを保管したのである。このような方法を用いて、自分たちが固有なカリスマ的な天分を自由に使うことができる選抜された者たちに属していることを確認したのである³¹⁾。ヤーンが若者によって創られたトゥルネン場を視察したり、そこを「三番目に美しいドイツ」として讃えるとき、こ

のことはヤーンのなかで自身の活力を見出すことができる賞賛であった（Ender 1867: 323）³²⁾。

「トゥルネンの使者（Sendboten des Turnens）」として各邦へと赴いていった多くの若いトゥルナーたちは、ヤーンが彼らを選んだがゆえにそれを実行できたとしても³³⁾、「トゥルネンの父」の個人的な影響力だけが、これらの活動の拡大を成功させる唯一の前提ではなかったのである。さらなる前提として、物質的な収入が確保されなければならなかったのである。M. ヴェーバーは「若者や取り巻きの多くは、自分たちの生活を長期的には職業で賄いたいし、またそれを減少させてはならない」というこの要求をカリスマ的支配として定式化している（Weber 1976: 145=1954: 61）。トゥルネンの普及をこの観点から考察するのであれば、ヤーンが派遣した多くの若いトゥルナーたちは、ヤーンの推薦を通じて、彼らの経歴のなかでは庇護されていたことが明らかになる。ヤーンは学校や大学の奨学金を設け、教師のゼミナールや高級官僚への門戸を開き、市参事会とのねばり強い交渉によってトゥルネン教師にたいする給料を獲得した。一般に然したる関係も持たないトゥルネンの使者から「何か」が生まれたとすれば、多くの場合、それはヤーンの功績であった。1813年と1814年にリュツヴォの義勇軍に参戦したハーゼンハイデのエリート・トゥルナーから以下のような職業人が生まれた。例えば、財政評議員、法律顧問官、郡長、陸軍少将、多くの将校（騎兵隊も）、公使館付きの伝道師、4名の医師、大勢のトゥルネン教師や教師 - その一部ではあるが、ギムナジウムの教師やゼミナールの指導者にまで及んだ - が任用されたのである（Düding 1984: 65ff; Cotta 1913: 70f）³⁴⁾。

3. 「カリスマ」から「官僚制」へ - ヤーン以降のトゥルネン運動

1817年から1818年の間に、プロイセンには約100のトゥルネン組織と6000名のトゥルナーが存在していたが、ヤーンはその影響力を最大限に行使した³⁵⁾。K. H. ショドロク (K. H. Shodrok) は、様々な政府機関との間で交わされた往復書簡の分析によってこのことを仔細に浮かび上がらせた。例えばショドロクは、このことを以下のように述べている。

トゥルネンの授業は、公的な学校の科目準則のうちに完全に位置づけられた。『ドイツ・トゥルンクンスト (Deutsche Turnkunst)』は、国家的権威を付与された教科書として認定され、普及されることになった。新たに設置された文部省において、トゥルネンの内容的な目的を準軍事的な手段として理解することが大方のコンセンサスを得ていた。ヤーンとアイゼレンは、トゥルネン教育学のキャリアの頂点に立った。アイゼレンが彼の仕事を将来のトゥルネン教師の養成へと専心していく一方で、ヤーンはプロイセン全体のトゥルネン検査官の役割を担うことになった。ヤーンは、政府にたいして新しいトゥルネン場の建設に関する助言を行った。ヤーンの弟子を地方のトゥルネン施設に派遣した。また、新しいトゥルネン講師職の補充に際し、関係諸機関はヤーンに仲介を求めた。その際、たいていヤーンが選びだした候補者が任命されたのである (Schodrok 1989: 189)。

しかし政治状況が変化し、メッテルニヒが政治の舞台に登場することによって、トゥルネンの絶頂期は突然終焉を迎えることになる。

1819年にヤーンは6年の禁固刑を求刑され、若者たちとの接触の機会を失った。とはいえ「トゥルネン禁止」が発令された当初においては、トゥルネンは多くの学校において教えられていた³⁶⁾。しかしながら、政治運動の社会的基盤としてのトゥルネンは弾圧されることになったのである。ヤーンの個人的な事情から、フォアトゥルナーはヤーンと同様に逮捕されることはなかったが、彼らは少なくとも公職禁止令を受けたり、さらなるキャリアが絶たれたことを理解した。また、彼らの多くはアメリカへと移住していった。それによってヤーンのもとに集まった若者の一団は、削減され、彼らの結束は崩壊したのである (Storck 1989: 211-247; Wildt 1964: 44ff)。

このような政治的介入によって、トゥルネンの社交的要素は新しいニュアンスを受け入れることになる。再びトゥルネンにたいする住民の関心を呼び起こさないために、当局は、これまで自由に屋外で行われていた運動を閉鎖された空間のなかで行うことを命じた。このように分断されたトゥルネンモデルは、1840年代以降、市民的な自由主義的な運動に取り入れられ、協会活動という形態へと移行していった。進歩的な19世紀において、トゥルネン協会が大衆的になればなるほど、そのトレーニングの「あり方」は、ヤーンによって創られた伝統からますます遠ざかることになった。部分的に市の助成金によって建設された屋内のトゥルネン施設は、まもなく唯一認可されたトレーニング場として見なされ、とりわけ悪天候の際、協会活動を維持したり、労働している民衆を統合することを可能にした。すなわち、これらの人々は、一般的には終業以降、例えば夕暮れ以降に参加することができた。そのうえ、進展する都市化

やそれとともに現れた土地投機は、ますます協会活動にたいして土地を獲得することを不可能にさせた。増加した会員数によって生じた屋内トゥルネン施設への詰め込みすぎという事態の結果、遅かれ早かれ、そこはドリル的な要素が運動時間のなかに入り込むことになった。なぜならば、その方法においてのみ、フォアトゥルナーの規律を確立することが出来たからである。

この状況下で個々のトゥルナーがカリスマを発展させたことはありそうもないことである。その代わりに結成された協会ないし、1868年、ドイツトゥルナー連盟の成立以降の連合組織にみられる官僚制化は、役員の型の成立を促した。このトゥルネンの役員たちが、第二帝政成立後に到来したイギリススポーツにたいして、ヤーンの名において戦ったことは歴史の皮肉であったというほかない。なぜなら、このスポーツというのは、いくつかの配慮において、ヤーンのトゥルネンにおける自由で無定型な要素を復興しようとしていたからである。

*この論文は拙稿「国民的カリスマリーダー - トゥルネンの父・ヤーン (Charismatic Nationalist Leader: Trunvater Jahn)」を加筆したものである。なお拙稿は、Richard Holt / J. A. Mangan / Pierre Lanfranchi (eds.): *European Heroes: Myth, Identity, Sport*. London 1996 に収められている。

注

- 1) シュブレンガーの論文は、トゥルネン運動に関するヤーンの評価のみを説明している (Sprenger 1985)。
- 2) Weber (1976: 140-146=1954: 49-69, 1976: 654-681=1962: 398-411) を参照。
- 3) ヤーンの人物像に関しては Meyer (1904), Frank (1972), Jahn (1992) を参照。
- 4) 例えば, Ueberhorst (1969) や Stadion 誌の「ヤーン特集号」(1978) を参照。シュブレンガーは「19世紀ないし20世紀初頭のトゥルネン運動において、すでにこの解釈が広められた」と指摘している (Sprenger 1985: 191f)。
- 5) 学生運動に関しては, Hardtwig (1985: 1992) を参照。学生運動と関係したヤーンの活動については, König (1973: 85f) を参照。ロマン主義の影響に関しては, Zieschang (1973: 170ff) を参照。
- 6) 新しい研究状況をまとめたものとして, Wehler (1987: 397-485) を参照。
- 7) グナイゼナウの回想録において、「私講師であったヤーンは、愛国的な信念や同じ目的に向かって他者を興奮させることにたいする恩給を報ぜられていた」と記されていた (Neuendorff o.J.: 51)。また, Flad (1929: 32), Johnston (1990: 27ff, 175) を参照。ジョンストンは、1806/07年以降書籍市場が崩壊し、それゆえに多くの知識人たちは、国家的な教養場の締約によって規則的な収入を得ることになった、と記している。
- 8) 「ドイツ的民族性」のもとでなされた様々な改革案の採用に関しては, Johnston (Johnston 1990: 170-175) を参照。また、教養の政治的な表象の一致に関しては, Jesmann (1974: 246) を参照。これ以外の一致、しかし、軍隊の改革に関する若干の性格的な差異、特にシャルンホルストの表象については, Antonowytsh (1933: 20-25) を参照。
- 9) ショドロクの研究はアルヒーフの原典を用いて、このことを証明している (Schodrok 1989: 111ff., 181-191)。またこのような研究は、すでにアイヘル等によっても行われている (Eichel 1965f., 71f)。
- 10) GutsMuths (1793), 同様に Bernett (1971) を参照。グーツムーツ訪問に関して、ヤーンは1807年7月7日付けの Georg Siemens への手紙のなかで伝えている (Jahn 1930: 30f)。
- 11) この学校に関しては, König (1973: 144-

- 151), Wassmannsdorff (1971: Nr. 17, 95f; Nr.18) を参照。
- 12) この点に関しては, Stein (1986) の論述を参照。
- 13) この点に関しては, Bornemann (1814: 44, 47), Düding (1984: 55) を参照。
- 14) 7月25日付のヤーンからフォイヤースシュタインへの手紙(ハルミッシュの手紙にたいする追伸)(Jahn 1930: 58) を参照。
- 15) それに関しては, Cotta (1913: 60ff), König (1973: 178ff) を参照。
- 16) Körner (1928: 70), Cotta (1913: 84), Schodrok (1989: 183) を参照。ベルリンにおいて, 給料は別の教員にも支払われていた。この点に関しては, Müller (1977: 192) を参照。
- 17) 1818年4月11日付のヤーンからデッサウの視学官 Vieth への手紙 (Jahn 1930: 123) を参照。ヤーンの弟子であったパッソウもまた, 同じような地位を代表していた。
- 18) 1811年7月25日付のヤーンからフォイヤースシュタインへの手紙 (Jahn 1930: 57) 。
- また, 同年11月4日付けのヤーンからアルントへの手紙を参照。そこには, 次のようなことが記されていた。「頑固で, 闘争的。突撃, 戦いの眼差しを向ける。高貴なエネルギーの現れである暴力としての急襲は, 我々にとって古代からの記憶である。一般に, トウルナーは戦争の従徒である。トウルナーは, ドイツ的な種族として周知のことである」(Langenfeld und Ulfkotte 1990: 31) 。
- 19) この点に関しては, Zeidler (1942: 37, 44, 55f) を参照。また同様に「ドイツ的なトウルネン」の中間報告における豊富な「造語」に関するヤーンの「試験」を参照 (Jahn und Eiselen 1816: XLIV f) 。
- 「トウルネンの名手」に関しては, 同上書 (XLI ff) を参照。同様に, Dürre (1881: 96) を参照。
- 20) これは, Ueberhorst (1972: 22) と Langewiesche (1990: 33) の解釈が対立している。一般に, 動機づけと機能に関しては, 解放戦争時に向けた言語改革的な努力である (Gessinger 1980: 149-152) 。
- 21) 場合によっては, プラマン学校の制服が「ドイツ的な衣装」の手本とされた。この点に関しては, Wassmannsdorff (1871: Nr. 18 105) を参照。
- 22) この点に関しては, Jahn und Eiselen (1816: 226), Jahn (1810: 314) を参照。この「衣装」の人気のに関しては, Kaschuba (1988: 28) を参照。衣装の理念の由来に関しては, Bringemeiner (1981: 44f) を参照。
- 23) 「ある者は他人から学び, また新しい運動が考案されたならば, その発明の記憶の名誉は仲間内の回想では発明者にあった」(Cotta 1913: 26, 24ff) 。
- 24) この点に関しては, Zieschang (1973: 213-222) を参照。
- 25) Cotta (1913: 84) によって示された1818年のトウルネンに関するヤーンの報告を参照。
- 26) Düding (1984: 83-109), Geldbach (1975: 171), Richartz (1988: 87f) を参照。
- 27) ヤーンの「自己弁護」(Jahn 1884: Bd. 2 214), または Richartz (1990: 59f) を参照。
- 28) これまでは, 「男性同盟」におけるホモ・エロティックに関する研究が必要とされてこなかった。唯一の経験的な研究は, 国民社会主義に由来する。例えば Bungardt (1936) を参照。
- 29) このような点に関しては, 自伝的な物語「ドイツの思惟」にある (Jahn 1884: Bd. 1, 443) 。
- または Cotta (1913: 31) を参照。
- 30) ヤーンの影響力に関するさらなる典拠は, Cotta (1913: 28ff) や Düding (1984: 82f) を参照。
- 31) この解釈に関しては, Weber (1976: 140-148=1954: 49-69, 特に 1976: 141=1954: 51-53) を参照。頻繁に引用されるものとして, A. Diesterweg: Jahrbuch für Lehrer (1854) 。
- これ以降のものとして, Cotta (1913: 29) がある。
- 32) 多くの取り巻きが, 完全にヤーンの「理念的な要求」にしたがって彼らの生活を整えようとしたことは, ベルリンのマイスターと似たようなカリスマ的な特質をラントのなかで発展させた。Vgl. C. Euler の Art. Johann Karl Friedrich Salomo を参照 (Euler 1895: 442) 。
- また, トウルナーの Friedrich Schulze に関しては,

- Rudkowski (1910: 797) を参照。
- 33) それゆえに、デュディングの判断は、個々の例証の総数に基づいている (Düding 1984: 65)。
- 34) ランゲンフェルトは、親方職 (多くは手工業者であるが、またはレストランの主人、小売店主、兵士) は若干名存在したが、顔見知りのトゥルネン青年であると概括した (Langenfeld 1978: 28)。
- 35) プロイセンの外に、およそ50におよぶ組織が存在した。これらは基本的には自由都市や北ドイツの公国に分散していた。ただ特別な例として、ザクセン地方や南ドイツにもトゥルネン協会が誕生した。デュディングは、資料の総括と分析による数値化したデーターとして提示している (Düding 1984: 67)。
- 36) これに関しては、以下のものを参照。
Schulturnwesen (1866: 5425-26, 5443),
Jahrbücher (1843: 49-61; 1844: 106-143),
Klump (1942: 15-21), Gasch (1910: 47ff),
Neuendorff, Bd.3 (o. J., Kap. 1), Düding
(1984: 209f), Langenfeld (1986: 20; 1991: 333)

文 献

- ANTONOWYTSCH, M.: *Friedrich Ludwig Jahn. Ein Beitrag zur Geschichte der Anfänge des deutschen Nationalismus*. Berlin 1933.
- ARCHENHOLZ, J. W.v.: Über die von Herrn Jahn in Berlin eingeführtengymnastischen Übungen der Jugend. In: *Minerva - ein Journal historischen und politischen Inhalts* (1812) 16-22.
- BERNETT, H.: *Die pädagogische Neugestaltung der bürgerlichen Leibesübungen durch die Philanthropen*. Schorndorf 1971.
- BORNEMANN, J. J. W.: *Lehrbuch der von Friedrich Ludwig Jahn unter dem Namen der Turnkunst wiedererweckten Gymnastik. Zur allgemeinen Verbreitung der jugendlichen Leibesübungen*. Berlin 1814. (ND Münster 1981) .
- BRINGEMEINER, M.: *Ein Modejournal erlebt die Französische Revolution*, Münster 1981.
- BUNGARDT, K. M.: *Die männerbündischen Gründungen Friedrich Ludwig Jahns. Versuch ihrer Deutung als Bestandteile einer "Nationalpolitischen Erziehung"*. In: *Leibesübungen und körperliche Erziehung* 55 (1936), 530-537.
- COTTA, C.: *Die Frühlingszeit des deutschen Volksturnens*, Leipzig 1913.
- DÜDING, D.: *Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808-1847). Bedeutung und Funktion der Turner- und Sängervereine für die deutsche Nationalbewegung*. München 1984.
- DÜRRE, E.: Dr. Chr. Eduard L. Dürre. *Aufzeichnungen, Tagebücher und Briefe aus einem deutschen Turner-und Lehrerleben*. Leipzig 1881.
- EICHEL, W., u. a.: *Geschichte der körperlultur in Deutschland von 1789 bis 1917*. Berlin (DDR) 1965.
- EISENBERG, C.: *"English Sports" und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn 1999.
- [ENDER]: Rückerinnerung des Oberlehrers Ender. In: *Deutsche Turnzeitung* 12 (1867), 323.
- EULER, C. (Hrsg.): *Encyklopädisches Handbuch des gesamten Turnwesens und verwandter Gebiete*, Bd. 2, Wien 1895.
- FLAS, R.: *Der Begriff der öffentlichen Meinung bei Stein, Arndt und Humboldt. Studien zur Begriffsbildung in Deutschland während der preußischen Reformen*. Berlin 1929.
- FRANK, E.: *Friedrich Ludwig Jahn-ein moderner Rebell*. Offenbach 1972.
- GASCH, Rudolf.: *Geschichte der Turnkunst*. Leipzig 1910.
- GELDBACH, E.: *Sport und Protestantismus. Geschihite einer Begegnung*. Wuppertal 1975.
- GESSINGER, J.: *Sprache und Bürgertum. Zur Sozialgeschichte sprachlicher Verkehrsformen im Deutschland des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart 1980.

- GLEICHEN-RUSSWURM, A.: *Geselligkeit. Sitten und Gebräuche der europäischen Welt 1789-1900*. Stuttgart 1909.
- GÖHLER, J.: Die Leibesübungen in der deutschen Sprache und Literatur. In: W. STAMMLER (Hrsg.), *Deutsche Philologie im Aufriß*. Bd. 3. Frankfurt/M. 1962, 2974-3049.
- GUTSMUTHS, J. C.: *Gymnastik für die Jugend. Enthaltend eine praktische Anweisung zu Leibesübungen. Ein Beytrag zur nöthigen Verbesserung der körperlichen Erziehung*. Schnepfenthal 1793 (ND Dresden 1928). (抄訳 : 『青少年の体育』成田十次郎訳, 明治図書出版, 1979年)
- HARDTWIG, W.: Krise der Universität, studentische Reformbewegung (1750-1819) und die Sozialisation der jugendlichen deutschen Bildungsschicht. In: *Geschichte und Gesellschaft* 11 (1985), 155-176.
- HARDTWIG, W.: Auf dem Weg zum Bildungsbürgertum: die Lebensführungsart der jugendlichen Bildungsschicht 1750-1819. In: M. R. LEPSIUS (Hrsg.), *Bildungsbürgertum in 19. Jahrhundert. Teil 3: Lebensführung und ständische Vergesellschaftung*. Stuttgart 1992, 19-42.
- HARNISCH, W.: Friedrich Friesen als Erzieher und Lehrer. In: *Der Erziehungs- und Schulrath an der Oder*. (ND in: COTTA 1913).
- HOBSBAWM, E.: Introduction: Inventing Traditions. In: E. HOBSBAWM/T. RANGER (eds.) *The Invention of Tradition*. Cambridge 1983, 1-14. (邦訳 : 『創られた伝統』前川啓治, 梶原景昭他訳, 紀伊國屋書店, 1992年)
- JAHN, F. L.: *Bereicherung des Hochdeutschen Sprachschatzes versucht im Gebiete der Sinnverwandtschaft, ein Nachtrag zu Adelung's und eine Nachlese zu Eberhard's Wörterbuch*, Leipzig 1806. (ND in: JAHN: Werke, hrsg. v. C. EULER, Bd. 1, Hof 1884, 23-128).
- JAHN, F. L.: *Deutsches Volksthum*. Lübeck 1810.
- JAHN, F. L.: *Werke*, hrsg. v. C. EULER, 3Bde. Hof 1884-1887.
- JAHN, F. L.: *Briefe*, hrsg. v. W. MEYER. Dresden 1930.
- JAHN, F. L./ EISELEN, E.: *Die Deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze*, Berlin 1816.
- JAHN, G.: Friedrich Ludwig Jahn. Volkserzieher und Vorkämpfer für Deutschlands Einheit. Göttingen 1992.
- JAHRBÜCHER DER DEUTSCHEN TURNKUNST, hrsg. v. K. EULER. Solingen (1843) 1, (1844).
- JEISMANN, K-E.: *Das preisische Gymnasium in Staat und Gesellschaft. Die Entstehung des Gymnasiums als Schule des Staates und der Gebildeten, 1787-1817*. Stuttgart 1974.
- JOHNSTON, O. W.: Der Freiherr vom Stein und die patriotische Literatur. Zur Entstehung des Mythos der Nation in Preußen in napoleonischer Zeit. In: *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der Literatur* 9 (1984), 44-66.
- JOHNSTON, O. W.: *Der deutsche Nationalmythos. Ursprung eines politischen Programms*. Stuttgart 1990.
- KASCHUBA, W.: Deutsche Bürgerlichkeit nach 1800. Kultur als "symbolische Praxis". In: J. KOCKA (Hrsg.): *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland im europäischen Vergleich*. Bd. 3. München 1988, 9-44.
- KLUMPP, F. W.: *Das Turnen. Ein deutschnationales Entwicklungs-Moment*. Stuttgart, Tübingen 1842.
- KÖNIG, H.: *Zur Geschichte der bürgerlichen Nationalerziehung in Deutschland zwischen 1807 und 1815*, Teil 2. Berlin (DDR) 1973.
- KÖRNER, R.: Friedrich Ludwig Jahn und sein Turnwesen. In: *Forschungen zur Brandenburg u. Preuß. Geschichte* 41 (1928), 38-82.
- LANGENFELD, H.: Jahns Einfluß auf die Entwicklung der körperlichen Erziehung im bürgerlichen Zeitalter. In: *Stadion* 4 (1978), 1-32.

- LANGENFELD, H.: Von der Turngemeinde zum modernen Sportverein. Stationen auf dem 175 jährigen Weg von Jahn zu Weyer. In: PILZ, G. A. (Hrsg.) : *Sport und Verein*. Reinbek 1986, 15-42.
- LANGENFELD, H.: Der zweite Turnverein. In: LUH, A./ BECKERS, E. (Hrsg.) : *Umbruch und Kontinuität im Sport. Reflexionen im Umfeld der Sportgeschichte. Festschrift für Horst Überhorst*. Bochum 1991, 328-338.
- LANGENFELD, H. / ULFKOTTE, J. (Hrsg.) : *Unbekannte Briefe von Friedrich Ludwig Jahn und Hugo Rothstein als Quelle zur Frühgeschichte des Turnens*. Oberwerries 1990.
- LANGEWIESCHE, D.: "...für Volk und Vaterland kräftig zu wirken..." Zur politischen und gesellschaftlichen Rolle der Turner zwischen 1811 und 1871. In: GRUPE, O. (Hrsg.) : *Kulturgut oder Körperkult? Sport und Sportwissenschaft im Wandel*. Tübingen 1990, 22-61.
- LIEBETRAUT, F.: Rückblicke auf das goldene Zeitalter des neuerweckten Turnwesens. In: *Deutsche Turnzeitung* Nr.15 (12. 4. 1867) , 93-97.
- MEYER, W.: *Friedrich Ludwig Jahn. Ein Lebensbild aus großer Zeit*. Berlin 1904.
- MÜLLER, D. K.: *Sozialstruktur und Schulsystem. Aspekte zum Strukturwandel des Schulwesens im 19. Jahrhundert*. Göttingen 1977.
- NEUENDORFF, E.: *Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart*. 3Bde. Dresden o. J.
- PASSOW, F.: *Turnziel*. Breslau 1818.
- RICHARTZ, A.: Turner, auf zum Streite! Die Bedeutung von Gruppenphantasien für die frühe Turnbewegung. In: GEBAUER, G. (Hrsg.) : *Körper-und Einbildungskraft. Inszenierungen des Helden im Sport*. Berlin 1988, 83-11.
- RICHARTZ, A.: Sexualität - Körper - Öffentlichkeit. Formen und Umformungen des Sexuellen im Sport. In: *Sozial-und Zeitgeschichte des Sports* 4 (1990) 4, 56-72.
- RIESENBERGER, D.: Freiherr vom Stein: Öffentliche Meinung, Kriegsmobilisierung und politische Neuordnung. In: DÜLFFER, J. (Hrsg.) : *Kriegsbereitschaft und Friedensordnung in Deutschland 1800-1814* (= *Jahrbuch für historische Friedensforschung* 3, 1994) . Münster 1996, 57-75.
- RUDKOWSKI: Die erste Turnanstalt in Liegnitz. Eine kulturhistorische Skizze aus dem Anfang des 19. Jahrhunderts. Nach Akten bearbeitet. In: *Deutsche Turnzeitung* Nr. 55 (1910) , 797-800.
- SCHODROK, K.-H.: *Militärische Jugend-Erziehung in Preußen 1806-1820*. Olsberg 1989.
- Das SCHULTURNWESEN in Württemberg. In: *Beilage zur Allgemeinen Deutschen Zeitung*, Augsburg, Nr. 330 (26. 11. 1866) , 5425-26, 5443.
- SIMMEL, G.: *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Berlin 1908 (ND 1983) . (邦訳 : 『社会学』 居安正訳, 白水社, 1994年)
- SPRENGER, R. K.: *Die Jahnrezeption in Deutschland 1871-1933. Nationale Identität und Modernisierung*. Schorndorf 1985.
- STADION 4 (1978) [Themenheft zu Jahn].
- STEINS, G.: *Wo das Turnen erfunden wurde...Friedrich Ludwig Jahn und die 175 jährige Geschichte der Hasenheide*. Berlin 1986.
- STORCK, K. D.: Turner und Polizei: Zur politischen Verfolgung von Turnern im deutschen Vormärz 1817-1821. In: *Stadion* 15 (1989) , 211-247.
- UEBERHORST, H.: *Zurück zu Jahn? Gab es kein besseres Vorwärts?* Bochum 1969.
- WASSMANNSDORFF, K.: Nachrichten über das Turnen in der Stadt Berlin vor und nach Jahn. In: *Deutsche Turnzeitung* Nr. 16 (1871) , 89-90; Nr. 17 (1871) , 95f.; Nr. 18 (1871) , 102-

- 106.
- WEBER, M.: *Wirtschaft und Gesellschaft. Grundriß der verstehenden Soziologie.* Tübingen 1976. (抄訳: 『権力と支配』 濱島朗訳, みすず書房, 1954年 邦訳: 『支配の社会学』 世良晃志郎訳, 創文社, 1962年)
- WEHLER, H.-U.: *Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Bd. 1: 1700-1815.* München 1987.
- WILDT, K. C.: *Auswanderer und Emigranten in der Geschichte der Leibesübungen.* Schorndorf 1964.
- ZEIDLER, J.: *Die deutsche Turnsprache bis 1819.* Halle 1942.
- ZIESCHANG, K.: *Vom Schützenfest zum Turnfest. Die Entstehung des Deutschen Turnfestes unter besonderer Berücksichtigung der Einflüsse von F. L. Jahn.* Diss. Würzburg 1973.